

# 消費社会の経験領域

——試験の視線とマス・メディア——

薬師院 仁志

Le champ d'expérience dans la société de consommation

——Le regard de l'examen et les mass-media——

YAKUSHIN Hitoshi

## I. はじめに

「技術的機能主義」(Karabel&Halsey 訳書1980.16頁)の社会理論は、近代社会の物語を産出していた。ここで言う物語とは、出来事に意味を与えながら、何らかの論理を反復する言説を指している。そこでは、意味を与えるべき出来事の方が、「論理に属する種類の現実」(Lévi-Strauss 訳書1976.112頁)を説明するための手段となっているのである。技術的機能主義の社会理論は、主体的かつ合理的な行為者と、その作品たる中立で機能的な社会システムという論理構成を前提し、反復し、弁護する形で、出来事に意味を与えてきた。そうすることによって、当の論理そのものをなぞってきたのである。それは、自分たちの社会をとらえようとしつつ、当の社会の顔を形作っていたのである。そして、前提となる論理が知の「実定的台座」(Foucault 訳書1974.20頁)としての地位を失ったとき、近代社会の物語も、その記述のリアリティを喪失してしまった。出来事に意味を与える作業は、別の論理の周りで展開するようになったのである。

あらゆる種類の社会過程の原理になっている階級脱落と再階級化の弁証法的関係は、関係しているすべての集団がみな同じ方向に、同じ目的に向かって、同じ特性をめざして走っているということを前提とし、また要求する。(Bourdieu 訳書1989.252頁)

ブルデューの諸記述は、現代社会において、一種の真理を啓示しているようにも見える。しかし、その作業は、階級闘争の論理を前提として、いくつかの解読コード(ここでは弁証法的関係)を差し出し、それらを参照することによって「あらゆる種類の社会過程」に意味を与えようとする試みである。その記述のリアリティは、われわれの日常経験が、ブルデューの要求した前提に準拠している度合に応じて保証されているにすぎない<sup>(1)</sup>。

ある社会がいかなる社会であるのかを知ることは、当該社会に固有の経験が、いかなる機序で編制されているのかをとらえることである。すなわち、われわれのいる社会を知ることは、自分たちの生きる現実世界が、なぜブルデューの要求したような前提に準拠した経験として与えられるのかを知ることなのである。ボードリヤールが消費社会を研究対象としたとき、問題設定はそ

こにあった。

消費社会、それは地位移動の可能な流動的社会である。幅広い層の人びとが社会階梯をよじのぼり、ひとつ上の地位に到達すると同時に文化的要求 (demande) を抱きはじめるが、それはこの地位を記号によって表示したという欲求にはかならない。(Baudrillard 訳書 1979.153頁)

この記述は、消費を、階級的地位の移動に対する欲求という前提に基づいて“意味づけ”ようとしているのではない。地位を記号によって表示しようとする欲求、およびそれに基づく営みが、消費社会に開かれた固有の経験であるということを確認しているのである。本稿の課題は、この経験領域がいかなるものであるのかを考察し、なぜそのような経験領域が成立しえたのかを、試験の諸位相 (phases) から理論的に浮び上がらせることである。

## Ⅱ. 消費社会

ボードリヤールの消費社会分析は卓抜である。ただし、事例的な考察としては優れているものの、理論的な一貫性を欠いている。本章は、消費社会とはいかなる社会であるのかを、ボードリヤールに依拠しながら、理論的な水準にまとめる試みである。もちろん、ある社会が一元的に消費社会に還元できるわけではない。しかし、消費社会と呼ばれる状況は、われわれのいる社会を他の社会と区別する固有の特徴のひとつであり、現代社会の大きな部分——明確に気づかれなくとも——に拡がる特徴なのである。

### (1) 人工物としての世界

消費社会では、現実そのものが、産業システムによって生産された人工物<sup>(2)</sup>として人々に与えられる。ボードリヤールは、この事態を確認したがゆえに、われわれの社会を消費社会と呼ぶのである。すなわち、消費社会とは、現実そのものが“人工的な生産物”として与えられており、人々の経験がその“消費”としてしか成立しないような社会のことである。

今日、出来事は出現させられる。つまり、つねに事実上の人工物として、メディアの諸形態の変装として、出現するのだ。(Baudrillard 訳書1991a.60頁)

われわれはここで、ブーアスティンが『幻影の時代』で述べた擬似イベント、擬似歴史、擬似文化の世界に入りこむ。それは、矛盾に満ちてはいるが現実的で流動的な経験から生まれたのではなく、コードの諸要素とメディアの技術的操作にもとづいて人工物として生産された出来事や歴史や文化や観念の世界である。(Baudrillard 訳書1979.181頁)

消費社会において、事実はマスコミによって製造される。差異 (社会的な意味) の産業的生産 (同.112頁) である。そこでは、事物の実在性の基準が、マス・メディアが投下する記号の反復度に相関している。ボードリヤールとブーアスティンは、ともにこの事態に着目した。しかし、それに対する両者のとらえ方は、本質的に異なっている。ブーアスティンは、「グラフィック革命は、新しい経験の範疇を作り出した」(Boorstin 訳書1964.221頁) ことや、「こしらえ上げられた現実に対するわれわれの信頼は、完全に現実的」(同.46頁) であることを認識しているにもかかわらず、依然として、この新しい経験領域を、<真の>現実たる「自然発生的出来事」(同所) に対立する“幻影”としてとらえている。しかも、人々が擬似イベントを求める理由として、それが劇的であること、理解しやすいこと、見るのに便利であること、共通の話題を提供すること

などを挙げているのである(同.48-49頁)。すなわち、人々が疑似イベントを求める根拠に、何らかの機能をもった事物に対する<合理的な>欲求を据えているのである。しかし、それならば、人々が疑似イベントを求めること自体は、人工的な要因に規定された行為ではないことになる。つまり、ブーアスティンは、経験領域の最も基本的な層における変容を認めていないのである。だから、<幻影>に対する現実的信頼を“批判”的にとらえるのである。これに対して、ボードリヤールは、現実なるものが成立する場が変容したことをポジティブにとらえている。人工的な現実とは、それ以前の現実原則に照らして見れば幻影だとしても、消費社会においては固有の<現実>であることを認識し、肯定しているのである<sup>(3)</sup>。

消費社会には、「自然発生的なものに対する、疑似イベントでないものに対する、われわれの絶望的な渴望」(Boorstin 訳書1964.267頁)があるのではない。人々は、「あらゆる錯覚を失うのではないかと恐れて現実原則に対して途方もなく無関心」(Baudrillard 訳書1990.109頁)になっているのである。

われわれが生きていると感じられるためには、幻覚を手段とするほかはないということなのである。(Baudrillard 訳書1991a.128頁)

メディアが提供するミックス・ジュースは、出来事のもたらすあらゆる絶頂感を準備する。われわれがそれを必要としているのは、まさしく出来事がわれわれに欠如しているからであり、確信がわれわれに欠如しているからである。ミルクとジャムあるいは自由などへの欲求よりも、シミュレーションへのさしせまった欲求こそを、われわれは強く感じている、たとえ戦争のシミュレーションであっても。……われわれは何ものにもまして、幻覚の享受を必要としている……。 (Baudrillard 訳書1991b.121-122頁)

人々が疑似イベントを求める理由はここにある。すなわち、<錯覚>こそわれわれがすがりつく<現実>なのであり、われわれに与えられた経験様式なのである。生の現実が発生しないと言うのではない。あらゆる事物は、生の出来事として経験されることがないということである。政治も経済もファッションも恋愛もセックスも趣味も信仰も、食生活や自然災害でさえも、人工的に生産された記号(イメージ)の世界に場所を得てはじめて、すなわち、人工的に意味を与えられたものになってはじめて、われわれにとっての現実となることができるのである。逆に言えば、消費社会においては、いたるところで、「出来事や思想や歴史のメディアによる置き換えの操作」(Baudrillard 訳書1991a.126頁)がなされているということなのである。

われわれの現実のすべてが、過去の悲劇的な出来事も含めて、もろもろのメディアの支配下に移行したことを、われわれは容易に忘れすぎる。(同.125頁)

もちろん、マス・メディアがすべての出来事を直接的に記号化するわけではない。しかし、マス・メディアは、世界を意味づける際の<準拠>となる「モデル」(Baudrillard 訳書1979.123頁・Boorstin 訳書1964.84頁)を提供することによって、われわれの生活世界を記号化しているのである。重要なことは、「われわれは(事実ではなく)モデルにしたがって思考」(Baudrillard 訳書1991a.126頁)しているということである。

マス・メディア化というのはまさにこのことなのだ。それはメッセージの伝播のひとつの技術集合といったものではなく、モデルの強制なのである。……実際、巨大な「媒体」とは、それは「モデル」なのである。メディア化されるということは新聞やテレビ、ラジオによ

て流されることなのではない。それはつまり、形態／記号によって把握しなおされ、コードによって支配されることなのだ。同様に商品とは工業的に生産されるものではなく、交換価値の抽象化システムによってメディア化されるものことなのである。(Baudrillard 訳書 1982c.228頁)

## (2) 記号としての世界

マス・メディアによって指示される現実、記号（という人工物）の世界である。人工の記号は、具体的な指示対象に先行している。マス・メディアは、記号を、言わば自己準拠的な記号としてわれわれに投下するのである。「メディアは……記号を記号として、しかしながら現実を保証されたものとして消費することを、われわれに命じるのである」(Baudrillard 訳書1979.26頁)。そこでは、あらゆるものが<実在>としての厚みを失い、人々は、「現実の記号によって現実を祓いのけ」(同.24頁) になる。「われわれは記号に保護されて、現実を否定しつつ暮している」(同.26頁) のである。消費社会において、人々の手にし得る経験は、人工的に生産された記号とかかわることにすぎない。そのような状況においてこそ、次のような言説が可能になるのである。

現代日本の消費者は「買うべきもの」を持たない。……「買うべきもの」がない以上、次に何をかうかは、当の消費者自身にもわからない。(関沢1985.23-24頁)

いまや、情報がその価値をもっとも発揮できる時代だといえよう。人々は、「分衆」としてその価値観、感性を確立するために、あらゆる機会を見つけて、情報の収集をはかり、自分に合う生きかたを模索している。(博報堂生活総合研究所1985.35頁)

これらの言説から、単に「欲望が宣伝に依存」(Galbraith 訳書1990.216頁) していることが読み取れるのではない。ガルブレイスの論法は、まず宣伝が特定のモノ (objet) に対する欲求を主体の内部に創り出し (誘発し)、次いでそのモノに対する消費が生まれるというものである。つまり、宣伝 (情報) は、主体的欲求のリストに新たな欲求をつけ加えるだけの機能を担っているだけなのである。それでは結局、人があるモノを買ったのはそのモノが欲しかったからだという前提を反復しながら、消費を意味づけているにすぎないのである。先に引用した言説から読み取らねばならないことは、そんなことではない。重要なのは、自己の価値観や感性、自分に合う生き方などが、メディアが投下した記号 (情報や宣伝) との接触において与えられるということである<sup>(4)</sup>。モノやサービスを購入する行為にしても、それらは、ある記号との接触なのであり、生きる場所やアイデンティティを得ようとする営みなのである。消費社会において、人があるモノを買うのは、主体の側にそのモノに対する欲求が先在するからではない。「欲求とはけっしてある特定のモノへの欲求ではなくて、差異への欲求 (社会的な意味への欲望)」(Baudrillard 訳書1979.95頁) なのである。たとえば、ある若者が有名ブランドのスーツを購入するとき、彼は、実物としての衣服——機能もデザインも含めて——を欲した以上に、それが他の記号＝商品との間に生じさせる意味 (微小な物語) を求めているのである。

それらの製品はひとつひとつ切り離されたのでは (自動車でも電気剃刀でも)、それ自体としては価値をもたない……。それらの集合的配置や全体の輪郭、モノとモノの関係、総体的「遠近法」だけが意味をもっている。(同.65頁)

われわれは、実在としてのモノにかかわるのではなく、人工的な記号（となったモノ）にかかわっている。逆に言えば、モノは、情報や広告の世界に場所を得てはじめて、われわれの〈欲求〉の対象、すなわち、われわれにとって関与的な現実になることができるのである。ある事物が消費社会における現実になるということは、それが“消費されるモノ”になるということなのである。

消費される物になるためには、物は記号にならなくてはならない。……それはその物質性においてではなく、差異において消費される。(Baudrillard 訳書1980.246-247頁)

現在われわれが、商品レヴェルの唯物論を越えて立ち合っているのは、宣伝とメディアとイメージをつうじてあらゆる事象が記号化される事態だ。(Baudrillard 訳書1991a.27頁)

われわれは、記号の世界に生きている。そして、その中にしか現実を見出せなくなっている。われわれの経験領域が変容しているのである。消費社会における諸現象を解明するためには、何よりも、この変容をとらえなければならない。

### (3) 記号による地位表示

われわれが記号<sup>(5)</sup>の世界に生き、その中にしか現実を見出せないということは、裏返せば、われわれが人工的に管理された世界に生きているということである。現代の社会システムは、個性を容認するという外面を呈しながら、人々を記号の世界で〈飼育〉しているのである。たとえば、人々が「自分に合う生きかたを模索」するのは、システムによってそれが課されているからにはほかならないのである。われわれは、記号との接触による〈自己実現〉を命じられ、まさにそのことによって管理＝制御されているのである。

われわれはわれわれ自身のアイデンティティーの人質だという地点にまで至った。……われわれは、自分自身であれ、話せ、楽しめ、自己実現せよと命じられている……。(Baudrillard 訳書1990.46頁)

われわれの社会は、自分自身を愛し、社会が押しつける法則にしたがって自分自身に執着すること以外の選択を許さない……。(Baudrillard 訳書1982b.236頁)

人々は、社会の〈命令〉に従って、自己のアイデンティティを求め続ける。だが、その行為の内実は、記号によって自己を表示していくことにほかならないのである。消費社会において、現実とは、人工的な記号による自己確認という経験を通じて与えられる。現実的な経験は、自己を記号と接触させることによってしか得られないのである。

すべての繫留点を失ってしまったかのように見えた人々が唯一すがりつく根拠として保持していたのは「自己」であり、また「自己の実感」として据えられるかぎりでの「現実」であった。(室井1988.142頁)

人々の手にしうる現実が、人工的に生産された記号との接触による「自己の実感」の確認ではないという事態は、具体的な水準において、地位を記号によって表示したいという欲求を現象させる。システム<sup>(6)</sup>は、「誰にも自分の社会的威信を確認したいという気持を起させて他人と比較させる」(Baudrillard 訳書1979.73頁)のである。指示対象を〈欠く〉自己準拠的な記号が意味や価値を持つのは、他の記号との差異によってのみであるから、結果的に、各人は他者との違い(卓越性)を追い求めることになる。記号との接触によって他者との違い(＝自己の実感)を

確認すること、消費社会においては、それが第一の営みであり、望み得る唯一の事柄とさえなってしまう。だからこそ、人々が記号によって表示された社会階梯を上昇しようとする現象が生じるのである。これを逆から見ると、消費社会における社会階梯の上下関係は、記号によって表示された他者との違いでしかないということになる<sup>(7)</sup>。それは、追及するモノ＝記号の質に基づいて産み出されるのである。

欲求の順序はなによりもまず社会的選択に従う……中間層や下層階級の欲求は、モノの場合と同じように、上層階級の欲求に対して時間的・文化的に一步遅れたりずれたりすることになる。(同.70-71頁)

ブルデューは、この現象を、「象徴闘争」(Bourdieu 訳書1989.385頁他)という解釈コードを提出することによって意味づけようとした。それに対して、ボードリヤールは、〈象徴闘争〉なるものが可能になる条件のなかに、消費社会の固有性を探っているのである。すなわち、「追及される財の質に結びついた社会的差別」(Baudrillard 訳書1979.63頁)は、欲求が、行為主体の側に自立的に存在するものではなく、システムに代補される要素になってはじめて可能になる現象だということを明らかにしたのである。

欲求は、何であれ、もはや決して自然主義的／観念論的テーゼが言うような、生まれつきの天賦の力、自発的欲望、人間学的潜勢力ではなく、システムの内在的論理によって諸個人の内部に誘導された機能である。より正確に言えば、欲求は、豊かな社会によって《解放された》消費力ではなくて、システム自身の機能、システムの再生産と延命の過程が要求する生産力である。いいかえれば、欲求が存在するのは、システムがそれを必要とするというただそれだけの理由による。(Baudrillard 訳書1982c.83頁)

「追及される財の質に結びついた社会的差別」が存在するのは、システムが、各人に消費可能な欲求のみを生産して(宛てがって)いるからにはかならない。つまり、この種の差別の源泉は、「渴望の生産過程」(Baudrillard 訳書1979.72頁)の不平等なのである。システムは、「システムの生産能力に適合的な欲求の流れを自ら創出」(内田1987.60頁)しているのである。

生産の秩序は自分に十分引き受けられる欲求だけを生じさせ、満足させるよう振舞うのである。経済成長の秩序においては、この論理に従えば自立的な欲求は存在しないし、また存在できない。(Baudrillard 訳書1979.75頁)

単純な例としては、産業システムは、〈高級な〉新製品が開発されると、それを上層階級にアイデンティティを与える記号として投下し、それが大量生産の系列に入ると、大衆にアイデンティティを与える記号に変更して投下するといった現象などが挙げられる。上層階級であれ大衆であれ、それぞれにふさわしい欲求を担わされ、割り当てられた消費行動の遂行のために動員されているのである。

欲求はシステムの要素として生み出されるのであり、個人とモノとの関係として生み出されるものではない。(同.91頁)

上層階級も大衆も、システムに飼育されているという点では〈平等〉なのである。だからこそ、社会的差別が生々しい闘争に結びつかず、「競争としての闘争という形をとるべく運命づけられて」(Bourdieu 訳書1989.387頁)いるのである。システムは、個人や階級の利害に呼応して動いているのではない。それは、それ自体の形式合理性のみを自己目的化した、巨大かつ空虚な自己

組織系なのである。そこには、「システムの論理」(Baudrillard 訳書1979.54頁)が働いている。

システムは自分が生き残るための条件しか認識しようとせず、社会と個人の内容については何も知らないのだ。(同.61頁)

すなわち、人々が——意識的であれ無意識的であれ——他者から自分を区別してきわだたせようとすることは、差異化の“強制”に対する服従であり、社会的コードへの登録なのである。

あなたをあなたの選んだ理想に近づけることによって、「本当のあなた自身」になることによって、あなたは集団の命令に最も忠実に従っていることになり、「押しつけられた」モデルに最も接近するのである。……各人が、これらのモデルを実現することによって独自の個性を見出したつもりになるのだ。(同.123-125頁)

消費者は自分で自由に望みかつ選んだつもりで他人と異なる行動をするが、この行動が差異化の強制やある種のコードへの服従だとは思ってもいない。(同.68頁)

補足しておく、ボードリヤールの言う「記号による地位表示」は、単なる衒示的消費のことではない。衒示的消費は、事物のもつ“威信や体裁を示す機能”に対する主体の欲求に基づくものであり、差異への欲求とは別物なのである。

差異化の論理と威信の単なる意識的規定とを区別しなければならない。なぜなら、これらの規定は依然として欲求の充足であり、プラスの差異の消費だが、差異表示記号の方は、常にプラスであると同時にマイナスでもある。したがって、これらの記号は他の記号を限りなく指示し、消費者の欲求を決して満たすことがない。(同.69頁)

また、ボードリヤールの分析は、「卓越化の戦略」(Bourdieu 訳書1989.102頁)に基づく説明とも異なる。卓越化の戦略とは、「稀少価値のある財や慣習行動をめぐる競争」(同.156頁)における戦略であるが、衒示的消費の理論とは少し違う。卓越化の戦略においては、その意図が行為者の意識の中に必ずしも含まれていなくてよいのである(Bourdieu 訳書1988a.209頁)。ブルデューは、行為者の意識の代わりに、「ハビトゥス」という概念を考案した。つまり、卓越化の意図が明確に意識されていなくとも、ハビトゥス、すなわち「持続的に教化された心的傾向」(Bourdieu 訳書1988b.85頁)の働きによって、「どんな吟味にも先立って」(同所)行われる実践でも、あとから考えれば「回顧的目的性を帯びている」(同書.105頁)というのである。衒示的消費を可能にするためには、威信誇示の欲求を主体的欲求のリストにつけ加える必要があった。同様に、卓越化の戦略を可能にするためには、潜在意識(前意識)の水準<sup>(8)</sup>に、ハビトゥスという根拠を指定しておく必要があったのである。一方、ボードリヤールは、次のように述べている。

ここで問題となるのは、威信・地位・差異表示の動機づけではない。このレベルは現代社会学によって大いにとりあげられたが、伝統的心理学の成果の擬似社会学的拡大の域を出ない。諸個人(あるいは個人に擬せられた諸集団)が意識的にせよ前意識的にせよ社会的順位と威信を求めることは、事実であって、このレベルも分析のなかで考慮されなくてはならない。しかし根本的なレベルは、差異の社会的生産を秩序づける無意識的構造のレベルである。

(Baudrillard 訳書1982c.71頁)

心的傾向の持続的な教化という図式は、動機づけの一種にすぎない。しかも、そのような動機づけの背後には、「個人や家庭は、無意識的にせよ意識的にせよ、……階級の関係構造における

自らの位置を維持しあるいは向上させようとする」(Bourdieu 訳書1989.199頁)のだという前提が置かれているのである。それに対して、ボードリヤールの分析は、「個人や家庭が、階級構造における自らの位置を保持し、あるいは向上させようとする」現象が、いかにして可能になるのかという、より基本的なレベルの問題に照準しているのである。

ブルデューは、記号化した世界をポジティブに眺めた数少ない論者のうちの一人であろう。その記述は、社会描写としては的確であるかもしれない。しかし、彼の仕事は、「階級的競争」という前提から出発して、消費社会における出来事に意味を与える作業にとどまっている。出来事に意味を与えながら、当の前提を反復しているのである。しかも、その分析は、近代的認識に緊縛された「体験の分析」(Foucault 訳書1974.341頁)の域を出ていない。そのことを自らも認めた上で(Bourdieu 訳書1989.122頁)、次のような注をつけている。

現象学的—記号学的分析を装った投影検査法の慣例(私はここで、J. ボードリヤールの『物の体系』のことを念頭に置いているのだが)とは別物の事物の世界の社会学が、これからどのような方向に進展していきうるかを示すためには、所有化された事物が、どのようなものであれ、客体化された社会的(階級)関係であるということを思いだせば充分である。(Bourdieu 訳書1989.413頁)

この記述は、ボードリヤールへの批判としては不当である。そもそも、所有化された事物が社会的(階級)関係であるのは、「もろもろの財はそれらが関係的に知覚されるやいなや弁別的記号へと転換する」(Bourdieu 訳書1990.364頁)ことを前提としている。『物の体系』は、このような転換(=事物の記号化)そのものを深く分析した著作なのである。ボードリヤールは、別の所で、次のように述べている。

この記号形態は記号による社会的差別化の機能と混同されてはならない。この機能はカースト的諸価値にノスタルジーを抱く貨幣階級たるブルジョア階級のドラマと同じ時代のものである。階級としてのブルジョアジーの確立と結びつき、今日では中間階級や小ブルジョア階級全体にまで一般化したところの、身分差別と権威の社会心理学の上に開花した文学は、一七世紀のフランス・モラリストたち以来すでに久しい(存在と現象との《弁証法》のなかにその哲学的反響がみられる)。しかしそんなことは今や問題ではない。(Baudrillard 訳書1981.113頁)

### Ⅲ. 試験の視線

本章では、消費社会の経験領域を可能にした条件を、試験の諸位相から探求する。消費社会は、明確には気づかれぬうちに現れ、徐々にわれわれの経験領域を覆ってきた。ボードリヤールは、経験領域の変容を「脱=近代性の革命」(Baudrillard 訳書1984a.199頁)と位置づけ、その転換点を1920年代であると測定している。

一九二〇年から一九三〇年にかけて、一九二九年の世界大恐慌を機に、過剰生産に直面した生産のシステムは、大量消費社会構造を組み入れはじめました。(Baudrillard 訳書1982a.36頁)

たしかに、生産のシステムが過剰生産に直面したことは、消費社会を産む契機になったに違いない。しかし、なぜ消費社会が誕生しえたのであろうか。システムが過剰生産に直面したからと

いっても、それだけでは都合よく消費社会が誕生する理由にはならない。つまり、「脱＝近代性の革命」が可能になった背景には、消費社会への移行を橋渡しするような接点が、近代社会の内部に準備されていたはずだと考えられるのである。本稿は、この接点として試験 (examen) に着目する。ボードリヤールは、試験について次のように語っている。

試験こそは社会的地位を向上させる有力な形式なので、ラジオ番組のような不純な形のものでもなんでもおかまいなしに、誰もが試験を受けたがる。……誰もがこの勝負において自分の社会的運命を保証され、新たな賭に挑むことになれば、古くさい社会管理機構なしですませることも可能かもしれない。(Baudrillard 訳書1979.142-143頁)

ここで、「古くさい社会管理機構」とは、フーコーの分析した一望監視装置を指していると思われる (Baudrillard 訳書1984b.16頁を参照)。ボードリヤールは、試験を、「古くさい」社会管理機構とは別種の地層に属するものとして位置づけ、試験が社会の全域に拡がれば、古くさい社会管理機構にとって替わりうるのだと指摘しているのである。だが、試験は、規律・訓練型の権力の主要な道具でもあったはずである。フーコーは、次のように指摘していた。

試験は依然として、しかもあい変わらず規律・訓練の内在的部分である。(Foucault 訳書1977.226頁)

要するに、試験<sup>(9)</sup>は、規律・訓練的な社会と消費社会の両方において、鍵になる要素として位置づけられているのである。ということは、試験こそ、近代社会と消費社会とを橋渡しする接点のひとつであると考えることができるのではないだろうか。

### (1) 規律・訓練

フーコーは、近代的な社会を「規律・訓練的な社会」(同.211頁)であると規定した。規律・訓練とは、ある型の権力であり、ひとつの技術論でもある(同.216頁)。それは、身体を記号体系に置き換えて空間と時間の中に配分し、個々人の活動を制御すると同時に、その活動から効用を引き出そうとする技術である。身体を記号体系に置き換えるという作業は、「顔を欠く視線 (regard)」(同.214頁)による監視を通して人々を可視化し、「個人を捕らえて、個人が何者であり、何ができ、また何に用いたらよいかを知り、どこに配置したらよいかを知る」(Foucault + 渡辺1978.173頁) ことである。ここで、顔を欠く匿名の視線による監視の効果が、具体的な監視者によって保証されているのではないということが重要である。一望監視施設によって図解されているように、可視化されていることは確かなのであるが、誰に見られているのかは不明なのである。つまり、監視されていることの根拠は、被監視者の内面の次元で想像されているにすぎないのである。規律・訓練は、「権力の自動的な作用を確保する可視性への永続的な自覚状態」(Foucault 訳書1977.203頁)を引き出すのであり、権力の効果は、顔を欠く匿名の他者の視線を被監視者自身の内部に抱え込ませることによって保証されるのである。自分が何者であるのかは、実際には、当人の内面として構造化される。己が準拠すべき内面を、(想像された視線の効果によって)自己自身に自覚させるのである。こうして、規律・訓練は、自己自身の内面に隷属する<個人>を形成する権力 (pouvoir) として作用することができるのである。(ここで問題にしているのは、価値や規範の内面化＝社会化の過程ではない。)

規律・訓練は、「兵営・学校・工場・監獄」(Foucault + 渡辺1978.173頁)などの諸装置におい

て具体化された。すなわち、国民軍・義務教育・機械工業・法の支配など、近代社会の固有性を示す特徴として考えられているものは、規律・訓練と深いかかわりを持つのである。また、近代的な個人という〈存在〉は、法と契約に基づく社会制度の基体であると同時に、主体的欲求の担い手として、経済活動の基体にもなっていた。このようなことから、フーコーは、近代社会を規律・訓練的な社会であると位置づけたのである。

規律・訓練は、階層秩序的な視線、規格化をおこなう (normalisatrice) 制裁、試験という三つの道具 (instruments) を用いる (Foucault 訳書1977.175頁)。その中でも、中心的な役割を演じるのが試験である。

監視をおこなう階層秩序の諸技術と規格化をおこなう制裁の諸技術とを結び合わせるのが、試験である。それは規格化の視線であり、資格付与と分類と処罰とを可能にする監視である。ある可視性をとおして個々人が差異をつけられ、また制裁を加えられるのだが、試験はそうした可視性を個々人にたいして設定するのである。(同.188頁)

試験によって、「規律・訓練を受ける個人性についての一連の記号体系 (codes) がすっかり形成される」(同.192頁)。人々は、試験によって見られる (可視化される)。すなわち、評点をつけられ、席次を定められ、合否を判定され、適性を測定され、他者との差異を明確にされるのである。しかし、試験を受けることによって誰に見られているのかは、曖昧なままである。受験者を監視する主体の場所には、任意の顔 (あるいは眼) を代入できるのである。ママやパパの視線、教師の視線、同輩の視線、あるいは、漠然とした世間の視線も含めて、それらは受験者 (被検査者) 自身によって想像あるいは自覚されるほかはないのである。試験官や採点者は、社会的監視の代理者もしくは媒介者にすぎない。いずれにせよ、それらの諸過程を通して、「各人は固有の個人性を身分として受取」(同.194頁)り、自己自身が何者であるのか、何をなすべき身分の人間なのかを、自己の内面の次元に構成させられることになるのである。

フーコーは、自己意識をもつ主体としての個人が、ア・プリアリな実在ではなく、ある操作を媒介にして構成された形象であることを明らかにした。規律・訓練は、各人の個人性 (individualité) を記号化することによって、これがお前の身分だ、お前の準拠すべきアイデンティティだと強制する過程なのである。

ところで、これらの過程は、人工的な記号との接触によって自己の実感が与えられるという過程と、本質的な隔たりはないのではないだろうか。なぜなら、試験によって明らかにされる「個人性」なるものは、試験という儀式 (疑似イベントと言ってもよい) が製造する人工物にすぎないからである。それは、外的な指示対象に先行する、自己準拠的な記号=現実であるとも考えることもできるのである。人々は、この人工的な記号を受け取ることによって、自己自身のアイデンティティを獲得していたとも言えるのである。このように考えると、試験が可視化する個人性なるものは、「ハイパーリアル」(Baudrillard 訳書1982a.47頁)の世界に属していることになる。ハイパーリアルとは、どんな現実よりも〈現実的〉な人工の現実のことであり、「過度の実在、事物の過度の実在性」(Baudrillard 訳書1985.39頁)のことであり<sup>(10)</sup>。試験によって提示される現実、たとえば、ある者が60点で自分が59点であるという現実、過度に現実的であると同時に、人間の視線では決してとらえることのできない現実でもある。すなわち、試験が明らかにする個人性とは、試験という〈道具〉がなければ決して現れない人工の現実であり、しかも、どんな視

線でとらえる評価よりも過度に厳密で赤裸々(=ハイパーリアル)なのである。試験の視線が拓く可視の領域は、当初から人工的な現実を指示していた。規律・訓練は、それが「《技術論的な》敷居をまたぐ」(Foucault 訳書1977.224頁)とき、すでに消費社会の扉を開いていたことになるのである。では、近代社会と消費社会はどう異なるのであろうか、次節では、その点を考察する。

## (2) 大きな物語

規律・訓練の諸装置は、個別身体を記号体系に置き換えて可視化してきた。ただし、そこでの記号は、消費社会において産業的に生産される記号と同一の機能を果たしていたわけではない。前者は「大きな物語 (grand récit)」(Lyotard 訳書1986a.8頁)の要素として意味を孕まれた記号なのである。近代的な社会では、人間的な意味の充満した物語が、記号の指示対象として用意されていた。監視する視線の存在を内面の次元で想像することは、顔を欠く視線に、各自が顔を与える作業である。そして、その作業は、各自が(意味の充満した)物語を参照することによって可能になっていたのである。すなわち、規律・訓練の装置が、自己意識をもつ個人主体を形成するためには、反復的に語られる物語と接続することが不可欠だったのである。技術的機能主義の知も、この種の物語において、権力と結びついていたのである。

フーコーは、規律・訓練の諸過程が最初に活動していた場所がコレッジであると測定し(Foucault 訳書1977.144頁)、配分の技術の例(同.151頁)としてとりあげた。そこでの試験の機能は、デュルケムによって、次のように描写されている。

生徒は、一方はローマ組、他方はカルタゴ組に分かれ、両者はいわば戦時体制におかれて、相互に相手を追い越すことに努めていた。各組にはそれぞれ高官の地位がおかれ、組の長には皇帝があった。これはまた独裁官とか執政官とよばれていた。その下に長官、護民官、元老院議員があった。これらの地位は当然生徒の羨望と競争的となったが、その配分は毎月行われる試験の成績を基にして替えられた。(Durkheim 訳書1981.519頁)

ここ——規律・訓練的な社会のミクロ・コスモスとしてのコレッジ——では、試験の提示する記号が、物語の要素に回収されている。生徒たちは、古代ローマの物語のなかに自分を当てはめることによって、自分自身を意味づけていたのである。そこでは、試験が切り取る<人工的な>記号に、人間的な意味の充満した指示対象が貼りつけられていた。ここでの記号には、外的な指示対象があらかじめ用意されており、それが自己準拠的なものとして現前してくることはなかったのである。顔を欠く視線が、人間の視線にすり替えられていたのである。つまり、人工的で無機的な世界が、人間的な厚みをもった現実へと巧みに読み替えられていたのである。規律・訓練が技術論の敷居をまたいだあとも、この事態に基本的な変化はなかった。物語の内容が、同時代的な主題の周りに展開されるようになってただけである。

近代社会は前近代の安定したピラミッド型の社会構造を破壊し、そこに流動状態をもちこんだわけだが、だからといって階層秩序そのもの、すなわちピラミッド型の枠組そのものまで放棄したわけではなかった。そこには、さまざまなかたちで階層秩序の構造が残っているし、またそれがあからこそそれらの段階を上昇すること(立身出世、人間的完成、経済成長、福祉の整備、軍事的優勢、貧困の撲滅、平等な社会の実現など)が理念的に可能であると信じられてきたのである。これらはひとつの理念を中心に構築された大きな物語……によって

方向づけられていた。人々は多様な事実をこうした物語の秩序に従って配列し、また自分自身の生の意味づけもこの物語から受け取っていたのである。(室井1988.135頁)

「物語るとは人間が文化を構成し、そのなかに生きることと同義である」(多木1990.147-148)。人々は、試験に対しても、様々な意味を追補し、物語化してきた。そして、その物語を参照することによって、監視する視線を<人間化>してきたのである。試験は、メリトクラシー (Young 訳書1965) およびそれによって実現される社会発展のための手段として、成功や立身出世へいたる手段として、大きな物語の中で意味を与えられてきた。試験が産み出す記号は、大きな物語に回収され、その中である位置を占めることによってのみ、人々にとって意味のある、実定的 (positif) な現実となることができたのである。

たしかに、試験の物語に対しては、度々疑義が打ち出されてきた。ある者は試験制度が目的を充分達成していないと指摘し、ある者は試験がメリトクラシーを歪曲し、その機能不全を必然たらしめると訴え、別の者は、試験がメリトクラシーの欠如を隠蔽しているのだと説いた。しかし、これらは、社会にとって安全な批判である。このような批判があるからこそ、教育改革の歴史＝物語 (histoire) が、不足や機能不全や欠如に対する闘いとして強く意味づけられるのである。つまり、このような批判は、試験制度が抱える<問題点>を、大きな物語との整合性という枠内に繋ぎ止めることを助けていたのである。

### (3) ネガティブな経験

本章(1)で指摘したように、試験が切り取る記号は、当初から自己準拠的な性格を孕んでいた。にもかかわらず、フーコーの分析において、試験は、人々を見る“効率的な道具”として、あくまでも技術的な位相でとらえられていたのである。しかし、試験による可視化は、一望監視施設における監視と必ずしも同値ではない。後者は、たとえ確証し得ない視線によるものであっても、人間の顔を代補されるべき視線による監視なのである。フーコーは、一望監視施設における監視について、次のように述べている。

一望監視のこの仕掛は、中断なく相手を見ることができ即座に判別しうる、そうした空間上の単位を計画配置している。……充分な光と監視者の視線のおかげで、土牢の暗闇の場合よりも見事に、相手を捕捉できる。その暗闇は結局は保護の役目しか果たしていなかったのだから。今や、可視性が一つの罫である。……見られてはいても、こちらには見えないのであり、ある情報のための客体ではあっても、ある情報伝達をおこなう主体にはけっしてなれないのだ。(Foucault 訳書1977.202-203頁)

一望監視施設では、見る側と見られる側が、はっきり分離している。可視的な領域は、見る側に保証されて拓かれるのである。たしかに、試験の視線にさらされる受験者(被検査者)も、一方的に見られる存在であるには違いない。しかし、見る側は誰なのか。客観式ペーパーテストのような試験、あるいはX線撮影のような検査(examen)を考えてみるとよくわかるように、examenにおいては、見る側が可視の領域を拓いているとは断言し難いのである。人間は、<監視者>も<被監視者>も、examen がとらえたものを二次的に経験するにすぎない。むしろこの場合、可視の領域は、examen 自体によって拓かれていると言えるのではないだろうか。すなわち、具体的な監視者は、代補されるべき欠在などではなく、登場の余地のない非在者なのである。見る

のは試験なのであり、人間ではないのである。このとき、試験の視線が、顔を欠く視線というより、顔を持つことのない、人工的で乾いた視線として浮び上がってくる。この視線は、たとえ明確には気づかれなかったとはいえ、近代的な規律・訓練の諸装置のいたるところに潜んでいたはずである。逆に言えば、規律・訓練の諸装置は、試験を道具として位置づけることによって、見る側と見られる側をなんとか分離し、この空虚な視線の顕在化を免れていたのである。

大きな物語は、ある意味で、規律・訓練型の権力がもたらしたものであり、その相補物として機能していた。大きな物語は、規律・訓練型の権力と結びつきながら、近代社会の「実定性 (positivité)」(Foucault 訳書1981.192頁)を規定していたのである。しかし、別の角度から見ると、物語を編むことは、規律・訓練型の権力がもたらした不気味な経験に対して、社会体がとった防御策であるとも言える。大きな物語と接続させることによって、試験を単なる道具としての地位にとどまらせることができたのである。近代的な社会において、人々は、大きな物語を語り継ぎ、<自己準拠的な>記号に具体的な指示対象を与え、その中に現実世界を見いだしていた。しかし、近代性の深層には、確実に、別種の経験領域が潜んでいた。人々は——気づこうと気づくまいと——人間の視線とは言い難い乾いた眼差しにさらされていたのである。たしかに、この眼差しが切り取る現実には、ある程度まで大きな物語に回収することができたのであろう。しかし、それにも限度がある。より<厳密>で<不偏>な試験制度への道は、さらなるハイパーリアルへの道でもあり、人々が試験に馴染んでいく過程は、そうとは気づかれぬうちに、顔を持つことのない視線を受け入れていく過程でもあったのである。すなわち、試験こそ、近代的な社会と消費社会とを深層で結びつけていた接点なのであり、脱=近代性の革命を可能にした条件——少なくともひとつの条件——なのである。

#### Ⅳ. 脱=近代性

フーコーは、学校が「中断のない一種の試験装置 (appareil d'examen) になる」(Foucault 訳書1977.189頁)と指摘した上で、次のように述べている。

試験は、精神医学や心理学などの科学との統合によって思弁的浄化を受けたかには見える。またなるほど試験は、テスト・対話・質問・診断などの形式をとって、表面上は規律・訓練の機構を修正しているかに見える。……しかしその点で思い違いをしてはならない、こうした技術は個人を或る審級の規律・訓練から別のそれへ移し替えるにすぎず……。試験は規律・訓練の技術論のなかにあい変わらず閉じこめられたままである。(同.226頁)

この記述は、一面では正しい。たしかに、思弁的浄化や形式の多様化によって、試験が権力機構から分離したとは言えない。しかし、試験は、規律・訓練とは別の<管理機構>へと場所を移していくのである。中断のない試験、あるいは試験の思弁的<浄化>や形式の多様化は、ある意味では試験の過度であり、試験が自らに与えられた用途を超越してしまう契機にもなるのである。試験方法や検査技術が<発達>し、より厳密に個人性を測定しようとするればするほど、試験は、過度に透明で、人間的な厚みを排除した無機的な可視性を人々に押しつけるようになるのである。

##### (1) 微小な物語

やがて、試験に対して社会体が編んできた大きな物語が、「コミュニケーションの滑らかな操

作的表面」(Baudrillard 訳書1987.232頁)を滑り落ちてゆく。試験が産み出す記号は、<外的な実在>との対応関係を昇華してしまうのである。その結果、大きな物語は、記号の指示対象としての地位から転落してしまう。すなわち、ハイパーリアルな世界が露顕してくるのである。たとえば、次のような出来事は、消費社会の経験領域に属する。

進研ではコンピューターによる偏差値の算出とこの微調整作業に二日間をかける。こうして受験生ひとりひとりの偏差値と、志望校の合格可能性の基礎数字ができあがる。しかし、これだけではまだ十分ではないという。……偏差値と通学圏から見た私立高校の紹介、テスト結果から見た今後の学習方法のアドバイスなど、受験生ひとりひとりに対する詳細なデータが加えられていく。いまの受験生は、ここまで詳しいデータを求めているのだという。

(NHK 取材班1983.106頁)

コンピューターの統計処理によって、小数点以下まで算出＝産出される偏差値。試験のデータ(記号)は、明らかにすべき個性に対して、異様なほど過度に透明である。データの方が指示対象以上に詳細なのである。それは、「可視的である以上に可視的なもの」(Baudrillard 訳書1987.239-240頁)である。ここでの記号は、もはや、何らかの外的事物を表象するものではない。それは指示対象を超越し、自己準拠的な人工物としての本性をあらわにしている。固有の指示対象に代補されて意味を保証されるのではなく、他の記号との差異だけが、ある記号に意味を持たせているのである。

偏差値は、各受験者に固有の学力を表象する値ではなく、受験者全体を差異化する記号である。その小数きざみの数値は、対象の中身を正確に表現しているがゆえに意味があるのではない。他者との差異の<厳密さ>だけが重要なのである。この時点で、人々は、大きな物語のなかに意味を求めめるのではなく、記号間の差異、すなわち、他者との違いとしての自己の実感を求め続けるよう要請されることになる。この事態は、大きな物語が記号の指示対象としての地位を喪失したということでもある。「大きな物語は、どれもどうにも信じられないものとなってしまった」(Lyotard 訳書1986b.54頁)のである。消費社会の成員は、記号間の差異によってその都度生じる微小な物語との接触のうちに自己や世界の束の間の意味づけを求め続け、その中に生きる他はないのである。リオタールは、次のように述べている。

もはやどんな物語も信じられない、と言っているのではない。……「大きな物語」の衰退は、小さな、そしてさらに小さな、無数の物語＝歴史が、日常生活の織物をおりあげつづけてゆくことを、さまたげはしない。(同.40頁)

われわれの日常生活は、小さな記号の戯れによって織りあげられている。われわれの経験は、大きな物語に統合されることなく、いたるところで「経験の断片化」(Boorstin 訳書1964.139頁)が始まるのである。記号は、大きな物語の中で確かな位置を占めるのを止め、他の記号との束の間の差異を表示しては消えてゆく。そして、人々は、その示差的記号から断片的な物語(差異に基づく社会的な意味)を受け取り、淡く人工的な現実を手にしてゆくのである。消費社会では、「あらゆるものが情報とコミュニケーションの苛酷で無情な(harsh and inexorable)光に晒され」(Baudrillard 訳書1987.239頁)ているのである。われわれは、人工的に明るみに出された<現実>に取り囲まれている。そのなかで人々が手にする自己の実感とは、微小な物語との接触において獲得される、断片的なくアイデンティティにすぎないのである。

われわれに必要なのはインスタントな記憶、直接的な接続であり、瞬間的に確認されるようなCM的なアイデンティティである……。 (Baudrillard 訳書1991.36頁)

モノの世界も同様である。モノは記号になっている。指示対象を欠く示差的記号が、〈地位〉やライフスタイルを表示する微小な物語を次々と産み出し、更新してゆくのである。消費は、この人工的で断片的な物語との、連鎖的な接触過程となっている。そうであるからこそ、次のような出来事が可能になるのである。

衣料専門店「クレヨン」も……商品のイメージとして「ケンブリッジ大学卒の英国人の父と京都生まれの才女の母を両親に持つ」という想像上の家族が着るような品ぞろいを設定。……雰囲気づくりのため、店内には物語の登場人物が使うような家具や小道具を配置。同社は、「……生き残りのためには、お客の生活スタイルを提案するような物語が必要」と説明している。(1991.7/10.朝日新聞)<sup>(11)</sup>

衣服は、実体としてのモノである以上に、生活(ライフ)スタイルを与える記号になっている。しかも、その流行はどんどん更新されるであろう。情報を収集して自分らしい生き方を模索するということは、自己のライフスタイルを授けてくれる記号との絶えざる接触を求めることなのである。「誰もが自分のイメージのプロデューサーになれる」(Baudrillard 訳書1991a.37頁)というわけである。このような状況では、人々が〈現実〉を受け入れるにあたって、もはや大きな物語など不要かつ不適である。「ここではわれわれは、もはや俳優や劇作家としてではなく、多様なネットワークの端末機として生きている」(Baudrillard 訳書1987.235頁)のである。たしかに、消費社会の出来事全体を意味づける〈理論〉を提出することはできよう。しかし、人々が生きてゆく上で、そんなものは不要なのである。具体的な意味は、微小な物語のなかに、その都度ごとに読み取られるのである。だからこそ、人々は、休みなく自己を記号で表示せざるをえない。この営みが消費であり、消費社会における固有の経験なのである。ここでは、人工的な記号との接触によって自己の地位(=他者との違い)を表示し続ける以外に、現実を手にする手段は存在しないのである。

## (2) テスト装置としてのメディア

ブルデューは、次のような現象を観察している。

様式的可能性の世界があるのと同じ数だけ、選好の空間が存在する。飲物(……)であれ自動車であれ、新聞・週刊誌であれヴァカンスの行き先や過しかたであれ、家の調度品であれ造園法であれ、また政治方針については言うまでもなく、これらの世界の各々がいくつかつの弁別の特徴を与えてくれるのであり、それらの特徴は差異の体系、示差的な隔差(écarts)の体系として機能しつつ……さまざまな社会的差異を表わすことを可能にしてくれるのである。……こうしたあらゆる可能性の世界のうちで、贅沢財(中でも特に、文化的財)の世界ほど社会的差異を表わす傾向の強い世界はないように思われるが、それは卓越化の関係がそこに客観的に書きこまれていて、ある消費行動をするたびに、その人が気づこうと気づくまいと、望もうと望むまいと、その消費のためにどうしても必要になる経済的・文化的的所有化手段を通して、はっきりと現われてくるからである。(Bourdieu 訳書1989.346頁)

ある階級は……その消費行動——これは見せびらかしのものでもなくとも象徴的なものであ

りうる——によっても定義されるものである。(Bourdieu 訳書1990.364頁)

ブルデューが見たとおり、消費社会においては、人々をその消費行動によって分類することが可能となっている。だが、注意が必要だ。この事態は、あらゆる社会において生じる現象ではなく、消費社会の経験領域に固有の現象なのである。かつて、規律・訓練の装置が人々を分類し、配分したように、ここでは、消費の過程が人々を分類し、それが階級の指標にもなっているのである。すなわち、消費社会においては、あたかも試験を受けるような形で消費行動が営まれているということである。人々は、その消費行動によって文化的・経済的に試され、分類され、ある<階級>へと配分され、それと同時に、自己の<アイデンティティ>に触れるのである。ボードリヤールは、次のように述べている。

メディアによって運ばれるすべての映像やメッセージ、いやそればかりでなくわれわれの生活をとりまくすべての機能的なモノは、みなそれ自体がテストである。……モノは人びとの役に立つのではなく、人びとをテストする。……今やわれわれはモノを使うひととしてというよりはむしろ、モノを読みとり、かつ選ぶひととして、つまり読解の細胞として生きているのである。だが、注意が必要だ。あなたが選択をおこなうと同時に、あなた自身がメディアによって選択され、テストされているのだから。調査のために見本を選ぶように、あらゆるメディアは、神経衝動のような触覚的で収縮的な不断の干渉や実験的調整という循環運動的操作によって、メッセージの束(要するに選択された質問の束)で、メッセージの受け手という見本を枠にはめて切りぬいている。(Baudrillard 訳書1982b.131-133頁)

ここでは、テストという形態をとりながら、試験がメディアと接続していることが理解できる。消費社会において、ある商品やサービスを購入する行為は、メディアが発する問いに答えることになるのである。商品やサービスの購入だけではない。消費社会では、人々の営みが人工的な記号＝現実の消費としてしか成立しない以上、そこでは、あらゆる行為が消費行動だということになる。すなわち、消費社会においては、あらゆる営みが、テスト／応答／自己確認の過程だということになるのである。メディアは、宣伝・情報・アンケート・メッセージなどの形で大量の記号を投下し、人々を記号で包囲する。そして、消費者は、それにいかにか答えるかによって自己を表示するのである<sup>(12)</sup>。つまり、人々は、絶えずマス・メディアによって試され、それに答えることによって自己を確認していることになるのである。この事態は、試験の思弁的浄化によるとは言えないにしても、試験の<応用>には違いない。消費社会において、試験は、規律・訓練の道具ではなく、メディアの操作的技術へと、その位相を変えているのである。そして、消費社会の人々が現実を手にするためにはメディアが投下する記号との接触を求めざるを得ない以上、「誰もが試験を受けたがる」という状況が成立するのである。消費社会では、誰もがテストされたがり、テストとその応答の過程のなかで人々が管理されているのである。人々は、テスト／応答の連鎖的な過程においてメディアに繋がれ、「多様なネットワークの端末」として生き、そのなかである種の<現実>を手に行っているのである。ボードリヤールは、次のようにも述べている。

マス・メディア文化のいちばんわかりやすい例は、それゆえラジオのクイズ番組だということになる。だがこの種の機構はそうした儀式的スペクタクルの枠を越えて、消費者の個別の行為だけでなく消費行動一般をも支配しているのだ。消費者の行動は多様な刺激に対する反

応の連続として組織される。趣味、好み、欲求、態度決定などの場合、消費者はモノの領域でも関係の領域でも絶え間なくそそのかされ、「質問され」、解答するよう催促されている。この意味で、モノを買うという行為はクイズ番組によく似ていて、今日ではある欲求を具体的な形で満足させるための個人の独特な行動というよりはむしろ、まず第一にある質問に対する解答——個人を消費という集団的儀式に引きずりこむための解答——なのである。

(Baudrillard 訳書1979.143-144頁)

消費社会において、現実、マス・メディアが投下する人工の記号として与えられる。そして、この人工的なハイパー現実、テスト／応答／自己確認という過程を通じて人々を巻き込み、人々をそのなかに繋ぎ止めているのである。マス・メディアは、一方的な情報やメッセージに個別に応答させることによって人々をテストし、分類し、＜階級化＞しているのである。人々の側は、あらゆる機会を見つけて情報を収集し、他者から自己を区別し、自分らしいあり方を確認しようとしているのであるが、これこそまさに、メディアが課する差異化の強制に対する服従にほかならないのである。われわれは、つねに試験の視線にさらされ、その乾いた眼差しに反応することによってのみ、自己の現実を手に入れている。今や、われわれは、テスト装置としてのマス・メディアに接続され、管理されていると言えるのである。すなわち、消費社会の経験領域は、＜試験＞の視線とマス・メディアとの結合によって成立していると言えるのである。

## V. おわりに

規律・訓練の＜起源＞について、フーコーは次のように指摘している。

こうした新しい政治解剖学が《考案》されたのを突然の発見のように理解してはならない。むしろ、起源のさまざまな、出所もばらばらの、しばしば些細な過程の多種多様な集まりとして理解する必要があるのだ……。 (Foucault 訳書1977.144頁)

この指摘は、試験という＜道具＞についてもあてはまる。試験は、規律・訓練の道具として考案されたものではないのである。規律・訓練と試験は、近代社会という特定の社会体において、偶然に遭遇＝接続したにすぎないのである。そもそも、「何よりもまず、世界史は、種々の偶発的な出来事の歴史であって、必然性の歴史ではない」(Deleuze et Guattari 訳書1986.172頁)のであり、場合によっては、両者の遭遇は起こらないこともありえたであろう。したがって、両者がつねに整合的で協力的な関係を保つことが保証されていたわけではないのである。事実、規律・訓練の代表的な道具であった試験は、権力の意図とは無関係に、人工的な記号との接触というネガティブな経験をもたらしていたのである。たしかに、見る仕組としての試験は、規律・訓練の道具として、また作用として、権力を支え、強化してきた。だが、同時に、権力を内側から蝕み、危険にさらし、その行手を妨げることをも可能にしてきたのである。

また、フーコーは、規律・訓練の一般化の過程に関して、次のように述べている。

権力の規律・訓練的な様式が他のすべての様式にとって替わってしまったからではなくて、その様式が他のすべての様式のなかにしみ込んで (s'est infiltrée) 時としてそれらを失効させる場合があっても、大抵はそれらの媒介として役立ち、それらを相互に結びつけ、それらを延長して、とりわけ、それらの最も細かく最も離れた構成要素にまで権力の効果を及ぼすことを可能にさせる……。 (Foucault 訳書1977.216頁)

テスト装置としてのマス・メディアによる管理の一般化についても、同様のことが言える。学校が中断のない試験装置になり、病院が中断のない検査装置としての機能を担うようになったとき、それらは、もはや規律・訓練の装置ではなく、モデルを強制するメディア＝装置へと変容しつつあるのである。それらは、依然として学校であり病院であるには違いないのだが、マス・メディアと同じく、一種のテスト機構となっている。すなわち、無機的な視線が、試験という接点を通して規律・訓練の諸装置にしみ込み、それらを破壊することなく、それらを延長し、それでいてそれらをメディア＝装置へと変容させていったのである。今や、あらゆる管理機構が、人々をテストし、記号化し、モデルを強制する〈メディア〉へと変容しつつある。そして、ボードリヤールの言うように、誰もがなんでもかんでもおかまいなしに試験を受けたがるようになったとき、この変容は完成するのである。

ボードリヤールは、フーコーの『監獄の誕生』について、「卓越した理論だが、すでに過去のものとなっている」（Baudrillard 訳書1984b.16頁）と指摘した。ただし、生産過剰に直面した生産のシステムが人々を記号の世界で管理できるようになったのは、すでに規律・訓練が記号の世界を用意していたからにはほかならないのである。たしかに、脱＝近代性の〈革命〉によって、人々の経験の様式は、社会的に編まれた物語の個人による体験から、人工的な記号との連鎖的な接触過程へと変容した。しかし、脱＝近代性は、近代性の破壊によって生まれたというより、その延長線上に生まれたものなのである。

#### 注

- 1) また、他の社会を見るにあたって、自分たちの論理を適用して理解しようとしている。
- 2) 本論において、「人工物」とは、ある主体によって意図的に製作されたものという意味ではない。むしろ、作者が不在の作用によって構成されたものことである。
- 3) ボードリヤールは、次のように述べている。

悪いのは、《生活程度についての強迫観念》であり、また《欲望の戦略》だということになる。しかし、A・モール（及び他のひとびと）は、このシステム（そしてそれが巻き込んでいるあらゆる消費過程）は、まさに合理的であり、それ自体完全に貫しているということを忘れていたのである。（Baudrillard 訳書1982c.262頁）
- 4) 消費社会における情報や宣伝は、その真偽や善悪を判断されるようなものではない。むしろ、真偽の区別さえ不関与で不可能なのである。先に引用した『「分衆」の誕生』には、次のような指摘がある。

情報は、「①速く②多く③正確なほど良い」という常識が通用しなくなったのかもしれない。特に、正確な、という要素は、必要条件ではなくなったといえる。（博報堂生活総合研究所1985.213頁）

また、ボードリヤールは、次のように述べている。

情報は、精度の悪いミサイル以上のものではない。行く先もはっきりせず、獲物をもとめて飛びまわり、あらゆる疑似餌に食いつく——情報自体が疑似餌なのだ。……的をしぼった宣伝や情報は、標的を限定したミサイルとおなじで、じつはどこに届くかわからない。たぶん、どこかに届くことではなくて、ミサイルとして発射されるということ自体が、本質的な任務なのだ……。 （Baudrillard 訳書1991b.56頁）
- 5) ここで言う「記号」は、自然言語の水準に属する記号ではない。
- 6) 消費社会は、ソシエテとしてよりも、むしろひとつのシステムとして運行している。ボードリヤールは、「〔社会的〕と言われるわれわれの関係の終りの終り」（Baudrillard 訳書1990.52頁）を指

摘し、次のようにも述べている。

法の時代そのものが過ぎ去り、それとともに、社会契約にある社会性と力との時代も過ぎ去ったからである。われわれはもはや規則と儀礼の時代に生きていないだけでなく、法と契約の時代にも生きていない。われわれは規準とモデルのなかに生きているのであり、社会性・社会的なものあとに来るはずのものについては、それを示すことばさえない。(Baudrillard 訳書1985.210頁)

- 7) ボードリヤールは、次のように指摘している。  
「不平等」という言葉は適当ではない。平等・不平等の対立は、イデオロギー的には現代的な民主主義の価値体系に結びついていて、経済的差異の概念をかりうじてカバーするだけであり、構造分析には役立たない。(Baudrillard 訳書1979.130頁)
- 8) 本稿における「無意識」の定義は、基本的には、次に引用するレヴィ＝ストロースの言葉にしたがうものとする。この定義にしたがうならば、ブルデューの提出した「ハビトゥス」という概念——その妥当性はともかく——は、無意識ではなく、潜在意識（あるいは前意識）の水準に属することになる。  
無意識と潜在意識のあいだには、現代心理学で習慣とされたよりもっとはっきりした区別をつけることが、たぶん必要になるだろう。というのは、潜在意識、すなわち各人の生涯のあいだに集積された記憶と心像との貯蔵所は、単なる記憶の一面になるからである。……これに反して、無意識はいつも空虚である。あるいは、もっと正確にいうと、胃が胃を通過する食物と異なったものであるように、それは心像と異なったものである。それは特定の機能をもつ器官であって、衝動、情動、表象、記憶といったよそからくる分節されぬ諸要素に、構造法則を課するだけであり、その実体はこれらの法則に尽きる。……潜在意識とは、われわれ各自がその個人的歴史の語彙を集めている辞典である……。 (Lévi-Strauss 訳書1972.224頁)
- 9) examen には多様な意味があるが、本稿では、基本的に「試験」という訳語を当てる。
- 10) 「潜在的なものによって現実的なのが抑制されるというハイパーリアルな論理」。(Baudrillard 訳書1991b.23頁)
- 11) この記事の見出しは、「物語付き”商品” 女性を的に続々」であり、本文に引用した部分以外にも、次のような記述がある。  
「仕事が憂うつな月曜日には、納豆味のふりかけ」「男性にもてたい時には、ラベンダーの入浴剤」など、消費者の気分を大事にした新製品が相次いで発売されている。商品そのものの宣伝は極力抑えて、その商品に物語性を付け、OLや主婦ら女性客の感性を直接、刺激するイメージ作戦だ。……森永乳業は「……買い物客の創造性を刺激するような商品でなければ、食料品でも思うように売れない」と説明。……バンダイも「入浴という単純な行為に一風変わった物語をつけて、若い消費者心理を刺激したい」という。……広告代理店の電通は、機能重視の宣伝だけでは飽きられてしまう最近の傾向を指摘、「商品の使い方やお客の生き方の提案など、踏み込んだ宣伝をしなければ商品の差別化は難しい」と話している。
- 12) ブルデューとパスロンは、世論調査も一種の試験であることを指摘している。(Bourdieu et Passeron 訳書1991.257頁)

## 文 献

- Baudrillard, Jean 1968 *Le système des objets*, Gallimard. = 1980 宇波彰訳, 『物の体系』, 法政大学出版局。
- \_\_\_\_\_ 1970 *La société de consommation: ses mythes, ses structure*, Gallimard. = 1979 今村仁司・塚原史訳, 『消費社会の神話と構造』, 紀伊國屋書店。
- \_\_\_\_\_ 1972 *Pour une critique de l'économie politique du signe*, Gallimard. = 1982c 今村仁司・宇波彰・桜井哲夫訳, 『記号の経済学批判』, 法政大学出版局。

- 1973 *Le miroir de la production*, Casterman. = 1981 宇波彰・今村仁司訳, 『生産の鏡』, 法政大学出版局。
- 1976 *L'échange symbolique et la mort*, Gallimard. = 1982b 今村仁司・塚原史訳, 『象徴交換と死』, 筑摩書房
- 1977 *Oublier Foucault*, Galilée. = 1984b 塚原史訳, 『誘惑論序説』, 国文社。
- 1979 *De la séduction*, Galilée. = 1985 宇波彰訳, 『誘惑の戦略』, 法政大学出版局。
- 1981 *Simuracres et simulation*, Galilée. = 1984a 竹原あき子訳, 『シミュラークルとシミュレーション』, 法政大学出版局。
- 1982a 竹原あき子訳, 「デザイン—経済学と象徴交換のあいだ」, 『シミュレーションの時代』, ボードリヤール・フォーラム編, JICC 出版局。
- 1983 "The Ecstasy of Communication" in Hal Foster (ed.) *The Anti-Aesthetic: essays on postmodern culture*, Bay Press. = 1987 室井尚・吉岡洋訳 「コミュニケーションの恍惚」, 『反美学』, 勁草書房。
- 1983 *Les stratégies fatales*, Grasset et Fasquelle. = 1990 竹原あき子訳, 『宿命の戦略』, 法政大学出版局。
- 1990 *La transparence de mal — essai sur les Phénomènes extrêmes*, Galilée. = 1991a 塚原史訳, 『透きとおった悪』, 紀伊國屋書店。
- 1990 *La Guerre du golfe n'a pas eu lieu*, Galilée. = 1991b 塚原史訳, 『湾岸戦争は起こらなかった』, 紀伊國屋書店。
- Boorstin, Daniel J. 1962 *The Image; or, what Happen to the American Dream*, Atheneum. = 1964 星野郁美・後藤和彦訳, 『幻影の時代』, 東京創元社。
- Bourdieu, Pierre 1979 *La distinction. Critique sociale du jugement*, Minuit. = 1989 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン I』, 新評論。= 1990 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン II』, 藤原書店。
- 1980 *Le sens pratique*, Minuit. = 1988b 今村仁司・港道隆訳, 『実践感覚 I』, みすず書房。
- 1987 *Chose dites*, Minuit. = 1988a 石崎晴己訳, 『構造と実践』, 新評論。
- Bourdieu, P. et Passeron, J.-C. 1970 *La reproduction: éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Minuit. = 1991 宮島喬訳, 『再生産 [教育・社会・文化]』, 藤原書店。
- Deleuze, G. et Guattari, F. 1972 *L'anti-Œdipe: capitalisme et schizophrénie*, Minuit. = 1976 市倉宏祐訳, 『アンチ・オイディプス』, 河出書房新社。
- Durkheim, Émile 1938 *L'évolution pédagogique en France*, P.U.F. = 1981 小関藤一郎訳, 『フランス教育思想史』, 行路社。
- Foucault, Michel 1966 *Les mots et les choses*, Gallimard. = 1974 渡辺一民・佐々木明訳, 『言葉と物』, 新潮社。
- 1969 *L'archéologie du savoir*, Gallimard. = 1981 中村雄二郎訳, 『知の考古学』 (改訳新版), 河出書房新社。
- 1975 *Surveiller et punir — Naissance de la prison*, Gallimard. = 1977 田村俣訳, 『監獄の誕生—監視と処罰』, 新潮社。
- Foucault, M. + 渡辺守章 1978 『哲学の舞台』, 朝日出版社。
- Galbraith, John K. 1984 *The Affluent Society*, Fourth Edition, Houghton Mifflin. = 1990 鈴木哲太郎訳, 『ゆたかな社会』, 岩波書店 (同時代ライブラリー11)。
- 博報堂生活総合研究所 (編) 1985 『「分衆」の誕生』, 日本経済新聞社。
- Karabel J. and Halsey A.H. 1977 "Educational Research: A review and an Interpretation" in *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press. = 1980 潮木・天野・藤田 (編) 訳, 『教育社会学のパラダイム展開』, 『教育と社会変動 上』, 東京大学出版会。
- Lévi-Strauss, Claude 1958 *Anthropologie structurale*, Plon. = 1972 荒川・生松・川田・佐々木・田島訳, 『構造人類学』, みすず書房。

- \_\_\_\_\_ 1962 *La pensée sauvage*, Plon. = 1976 大橋保夫訳, 『野生の思考』, みすず書房。  
Lyotard, Jean F. 1979 *La condition postmoderne*, Minuit. = 1986a 小林康夫訳, 『ポスト・モダンの条件』, 水声社。  
\_\_\_\_\_ 1986 *Le postmoderne expliqué aux enfants*, Galilée. = 1986b 管啓次郎訳, 『ポスト・モダン通信』, 朝日出版社。  
室井尚 1988 『メディアの戦争機械』, 新曜社。  
NHK 取材班 1983 『日本の条件11 教育② 偏差値が日本の未来を支配する』, 日本放送出版協会。  
関沢英彦 1985 『「差異」の戦略』, TBSブリタニカ。  
多木浩二 1990 『写真の誘惑』, 岩波書店。  
内田隆三 1987 『消費社会と権力』, 岩波書店。  
Young, Michael D. 1958 *The Rise of the Meritocracy*, Thomas & Hudson. = 1965 伊藤慎一訳, 『メリトクラシーの法則—2033年の遺稿』, 至誠堂。